

[B年]復活節第2主日(2026年4月12日)**【旧約聖書日課】民数記 13章1～2節、17～33節**

1主はモーセに言われた。

2「人を遣わして、わたしがイスラエルの人々に与えようとしているカナンの土地を偵察させなさい。父祖以来の部族ごとに一人ずつ、それぞれ、指導者を遣わさねばならない。」

17モーセは、彼らをカナンの土地の偵察に遣わすにあたってこう命じた。「ネゲブに上り、更に山を登って行き、¹⁸その土地がどんな所か調べて来なさい。その住民が強いか弱い、人数が多いか少ないか、¹⁹彼らの住む土地が良いか悪い、彼らの住む町がどんな様子か、天幕を張っているのか城壁があるのか、²⁰土地はどうか、肥えているかやせているか、木が茂っているか否かを。あなたたちは雄々しく行き、その土地の果物を取って来なさい。」それはちょうど、ぶどうの熟す時期であった。²¹彼らは上って行って、ツインの荒れ野からレボ・ハマトに近いレホブまでの土地を偵察した。²²彼らはネゲブを上って行き、ヘbronに着いた。そこには、アナク人の子孫であるアヒマンとシェシャイとタルマイが住んでいた。ヘbronはエジプトのツォアンよりも七年前に建てられた町である。²³エシュコルの谷に着くと、彼らは一房のぶどうの付いた枝を切り取り、棒に下げ、二人で担いだ。また、ざくろやいちじくも取った。²⁴この場所がエシュコルの谷と呼ばれるのは、イスラエルの人々がここで一房(エシュコル)のぶどうを切り取ったからである。²⁵四十日の後、彼らは土地の偵察から帰って来た。²⁶パランの荒れ野のカデシュにいるモーセ、アロンおよびイスラエルの人々の共同体全体のもとに来ると、彼らと共同体全体に報告をし、その土地の果物を見せた。²⁷彼らはモーセに説明して言った。「わたしたちは、あなたが遣わされた地方に行つて来ました。そこは乳と蜜の流れる所でした。これがその果物です。²⁸しかし、その土地の住民は強く、町という町は城壁に囲まれ、大層大きく、しかもアナク人の子孫さえ見かけました。²⁹ネゲブ地方にはアマレク人、山地にはヘト人、エブス人、アモリ人、海岸地方およびヨルダン沿岸地方にはカナン人が住んでいます。」³⁰カレブは民を静め、モーセに向かって進言した。「断然上って行くべきです。そこを占領しましょう。必ず勝てます。」³¹しかし、彼と一緒に行った者たちは反対し、「いや、あの民に向かって上って行くのは不可能だ。彼らは我々よりも強い」と言い、³²イスラエルの人々の間に、偵察して来た土地について悪い情報を流した。「我々が偵察して来た土地は、そこに住み着こうとする者を食い尽くすような土地だ。我々が見た民は皆、巨人だった。³³そこで我々が見たのは、ネフィリムなのだ。アナク人はネフィリムの出なのだ。我々は、自分がいなごのように小さく見え、彼らの目にもそう見えにちがいない。」

【使徒書日課】コリントの信徒への手紙二 4章7～18節

7ところで、わたしたちは、このような宝を土の器に納めています。この並外れて偉大な力が神のものであって、わたしたちから出たものでないことが明らかになるために。⁸わたしたちは、四方から苦しめられても行き詰まらず、途方に暮れても失望せず、⁹虐げられても見捨てられず、打ち倒されても滅ぼされない。¹⁰わた

したちは、いつもイエスの死を体にまもっています。イエスの命がこの体に現れるために。¹¹わたしたちは生きている間、絶えずイエスのために死にさらされています。死ぬはずのこの身にイエスの命が現れるために。¹²こうして、わたしたちの内には死が働き、あなたがたの内には命が働いていることとなります。¹³「わたしは信じた。それで、わたしは語った」と書いてあるとおり、それと同じ信仰の霊を持っていて、わたしたちも信じ、それだからこそ語っていてもいます。¹⁴主イエスを復活させた神が、イエスと共にわたしたちをも復活させ、あなたがたと一緒に御前に立たせてくださると、わたしたちは知っています。¹⁵すべてこれらのことは、あなたがたのためであり、多くの人々が豊かに恵みを受け、感謝の念に満ちて神に栄光を帰すようになるためです。

¹⁶だから、わたしたちは落胆しません。たとえわたしたちの「外なる人」は衰えていくとしても、わたしたちの「内なる人」は日々新たにされていきます。¹⁷わたしたちの一時の軽い艱難は、比べものにならないほど重みのある永遠の栄光をもたらしてくれます。¹⁸わたしたちは見えるものではなく、見えないものに目を注ぎます。見えるものは過ぎ去りますが、見えないものは永遠に存続するからです。

【福音書日課】ヨハネによる福音書 20章19～31節

¹⁹その日、すなわち週の初めの日の夕方、弟子たちはユダヤ人を恐れて、自分たちのいる家の戸に鍵をかけていた。そこへ、イエスが来て真ん中に立ち、「あなたがたに平和があるように」と言われた。²⁰そう言って、手とわき腹とをお見せになった。弟子たちは、主を見て喜んだ。²¹イエスは重ねて言われた。「あなたがたに平和があるように。父がわたしをお遣わしになったように、わたしもあなたがたを遣わす。」²²そう言ってから、彼らに息を吹きかけて言われた。「聖霊を受けなさい。²³だれの罪でも、あなたがたが赦せば、その罪は赦される。だれの罪でも、あなたがたが赦さなければ、赦されないまま残る。」

²⁴十二人の一人でディダイモと呼ばれるトマスは、イエスが来られたとき、彼らと一緒にいなかった。²⁵そこで、ほかの弟子たちが、「わたしたちは主を見た」と言うので、トマスは言った。「あの方の手に釘の跡を見、この指を釘跡に入れてみなければ、また、この手をそのわき腹に入れてみなければ、わたしは決して信じない。」²⁶さて八日の後、弟子たちはまた家の中におり、トマスも一緒にいた。戸にはみな鍵がかけられていたのに、イエスが来て真ん中に立ち、「あなたがたに平和があるように」と言われた。²⁷それから、トマスに言われた。「あなたの指をここに当てて、わたしの手を見なさい。また、あなたの手を伸ばし、わたしのわき腹に入れなさい。信じない者ではなく、信じる者になりなさい。」²⁸トマスは答えて、「わたしの主、わたしの神よ」と言った。²⁹イエスはトマスに言われた。「わたしを見たから信じたのか。見ないのに信じる人は、幸いである。」

³⁰このほかにも、イエスは弟子たちの前で、多くのしるしをなさったが、それはこの書物に書かれていない。³¹これらのことが書かれたのは、あなたがたが、イエスは神の子メシアであると信じるためであり、また、信じてイエスの名により命を受けるためである。

「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

民数記 13章1～2節、17～33節

1主はモーセに告げられた。2「人を遣わして、私がイスラエルの人々に与えようとしているカナン地の地を偵察させなさい。父祖の部族ごとに一人ずつ、彼らのうちの指導者を遣わしなさい。」

17モーセは次のように彼らに命じ、カナン地の偵察に遣わした。「ネゲブに行き、さらに山を登って、¹⁸その地がどのような所か偵察しなさい。そこに住む民が強いかわ弱いか、人数が少ないか多いか、¹⁹彼らの住む地が良いか悪いか、彼らの住む町はどうか、天幕を張っているのか城壁があるのか、²⁰土地はどうか、肥えているか痩せているか、木があるかないかを調べなさい。あなたがたはひるむことなく、その地の果物を取って来なさい。」季節はちょうど、ぶどうの熟し始める時期であった。²¹彼らは上って行き、ツインの荒野から、レボ・ハマトに近いレホブまで、その地を偵察した。²²彼らはネゲブを上って行き、ヘブロンに着いた。そこには、アナクの子孫であるアヒマンとシェジャイとタルマイがいた。ヘブロンはエジプトのツォアンよりも七年前に建てられた町である。²³彼らはエシュコルの谷まで行き、一房のぶどうの付いた枝を切り取り、棒で担いで二人で運んだ。また、ざくろといちじくも取った。²⁴この場所は、イスラエルの人々が切り取った一房のぶどうにちなんで、エシュコル(「一房」の意)の谷と呼ばれた。

²⁵四十日の後、彼らはその地の偵察から戻り、²⁶パランの荒野のカデシュにいたモーセ、アロン、およびイスラエル人の全会衆のもとに帰って来た。彼らは二人と全会衆に報告し、その地の果物を見せ、²⁷モーセに説明した。「私たちは、あなたがお遣わしになった地に行き来しました。そこはまことに乳と蜜の流れる地でした。これがその果物です。²⁸しかしながら、その地に住む民は強く、町は城壁に囲まれ、とても大きいのです。私たちはそこでアナクの子孫さえも見ました。²⁹ネゲブ地にはアマレク人が住み、山地にはヘト人、エブス人、アモリ人が住み、海辺とヨルダンの岸辺には、カナン人が住んでいます。」

³⁰カレブは民を静め、モーセに向かって、「私たちはぜひとも上って行くべきです。そこを手に入れましょう。私たちには必ずできます」と言った。³¹だが、彼と一緒にいった者たちは、「いや、あの民に向かって上ることなどできません。彼らは私たちよりも強いからです」と言い、³²偵察した地について、イスラエルの人々の間に悪い噂を広めて言った。「私たちが偵察のために行き巡った地は、そこに住もうとする者を食い尽くす地だ。私たちがそこで見た民は皆、巨人だった。³³私たちはそこでネフィリムを見た。アナク人はネフィリムの出身なのだ。私たちの目には自分がばったのように見えたし、彼らの目にもそう見えただろう。」

コリントの信徒への手紙二 4章7～18節

7私たちは、この宝を土の器に納めています。計り知れない力が神のものであって、私たちから出たものでないことが明らかになるためです。⁸私たちは、四方から苦難を受けても行き詰まらず、途方に暮れても失望

せず、⁹迫害されても見捨てられず、倒されても滅びません。¹⁰私たちは、死にゆくイエスをいつもこの身に負っています。イエスの命がこの身に現れるためです。¹¹私たちは生きている者は、イエスのために絶えず死に渡されています。イエスの命が私たちの死ぬべき肉体に現れるためです。¹²こうして、私たちの内には死が働き、あなたがたの内には命が働くのです。¹³「私は信じた。それゆえに語った」と書いてあるとおり、それと同じ信仰の霊を持っているので、私たちも信じ、それゆえに語ってもいるのです。¹⁴主イエスを復活させた方が、イエスと共に私たちをも復活させ、あなたがたと共に御前に立たせてくださると、私たちは知っています。¹⁵すべてのことはあなたがたのためであり、こうして、恵みがますます多くの人に及んで、感謝を満ち溢れさせ、神に栄光と多くののです。

¹⁶だから、私たちは落胆しません。私たちの外なる人が朽ちるとしても、私たちの内なる人は日々新たにされていきます。¹⁷このしばらくの軽い苦難は、私たちの内に働いて、比べものにならないほど重みのある永遠の栄光をもたらしてくれます。¹⁸私たちは、見えるものではなく、見えないものに目を注ぎます。見えるものは一時的であり、見えないものは永遠に存続するからです。

ヨハネによる福音書 20章19～31節

¹⁹その日、すなわち週の初めの日の夕方、弟子たちは、ユダヤ人を恐れて、自分たちのいる家の戸にはみな鍵をかけていた。そこへ、イエスが来て真ん中に立ち、「あなたがたに平和があるように」と言われた。²⁰そう言って、手と脇腹とをお見せになった。弟子たちは、主を見て喜んだ。²¹イエスは重ねて言われた。「あなたがたに平和があるように。父が私をお遣わしになったように、私もあなたがたを遣わす。」²²そう言ってから、彼らに息を吹きかけて言われた。「聖霊を受けなさい。²³誰の罪でも、あなたがたが赦せば、その罪は赦される。誰の罪でも、あなたがたが赦さなければ、赦されないまま残る。」

²⁴十二人の一人でディディモと呼ばれるトマスは、イエスが来られたとき、彼らと一緒にいなかった。²⁵そこで、ほかの弟子たちが、「私たちは主を見た」と言うので、トマスは言った。「あの方の手に釘の痕を見、この指を釘跡に入れてみなければ、また、この手をその脇腹に入れなければ、私は決して信じない。」²⁶八日の後、弟子たちはまた家の中におり、トマスも一緒にいた。戸にはみな鍵がかけてあったのに、イエスが来て真ん中に立ち、「あなたがたに平和があるように」と言われた。²⁷それから、トマスに言われた。「あなたの指をここに当てて、私の手を見なさい。あなたの手を伸ばして、私の脇腹に入れなさい。信じない者ではなく、信じる者になりなさい。」²⁸トマスは答えて、「私の主、私の神よ」と言った。²⁹イエスはトマスに言われた。「私を見たから信じたのか。見ないで信じる人は、幸いである。」

³⁰このほかに、イエスは弟子たちの前で、多くのしるしをなさしたが、それはこの書物に書かれていない。³¹これらのことが書かれたのは、あなたがたが、イエスは神の子メシアであると信じるためであり、また、信じてイエスの名により命を受けるためである。

黙想のためのノート

次主日の教会暦と聖書日課

・4月12日「復活節第2主日」の日課主題は「復活顕現」。「復活日(イースター)」から始まる「復活祭(復活節)」は、「聖霊降臨日」に至るまで続く。伝統的に「聖霊降臨祭」は「復活祭」の後祭と位置づけられてきたが、近年は「復活祭」と区別する傾向にある。

・旧約日課は、「民数記」から、モーセが遣わしたカナン偵察隊が報告をするまでの出来事を伝える説話箇所。使徒書日課は、「コリントの信徒への手紙二」から、「内なる人」に目を向けることで失望、落胆しないように勧める箇所。福音書日課は、「ヨハネによる福音書」から、復活の主イエスが弟子たちの間に二週にわたって現れられたことを伝える説話箇所。

旧約日課(民数記13章より)

・「民数記」は、ユダヤ正典(ヘブライ語聖書)の区分で「律法(トーラー)」の第四巻を構成する歴史物語文書。「出エジプト記」から「申命記」まで続く「モーセ物語」の第三部を構成し、「40年の荒野の旅」のほとんどを網羅する内容が展開される。

・日課箇所は、「40年の荒野の旅」の初期に、最初のカナン侵入を試みた経緯とその結果を伝える説話(民13~14章)の一部。「モーセ物語」によると、モーセに導かれたイスラエルの民は、3か月目にシナイ山に到着し、授与された「律法」に基づいて「第二年の第一の月、その月の一日」(出40:17)に「幕屋」を建設し、「第二年の第二の月の二十日」(民10:11)にシナイの荒野を離れてカナン地方に向かった、とされている。この後の一連の出来事については、「モーセ物語」に具体的な年月表示が見当たらないが、早い段階でカナン地方南部の「パランの荒野」(民12:16)に辿り着き、そこから最初のカナン侵入を試みた。しかし、このときは、事前に派遣した偵察隊の報告を受けたイスラエルの民々が怖気づき、カナン地方への侵入・入植には至らなかった。

・日課箇所で省略されている3~16節には、偵察隊として派遣された者たちの一覧が記されている。偵察隊は、十二部族のそれぞれから一名ずつが選ばれたものとされており、その中には、モーセの「従者」として「モーセ物語」の最初(出17章)から登場している「ヌンの子ヨシュア」も含まれる。ただし、この一覧では、「ヌンの子ホシュア」の名で挙げられた上で、この人をモーセが「ヨシュア」と呼んだと説明を加えている(16節)。この「ヨシュア」は「エフライム族」の代表で、他の偵察隊がカナン侵入に否定的な報告をする中で、彼と「ユダ族」代表の「エフネの子カレブ」だけが、カナン侵入を進言する報告をしたとされる。この二人は、40年の「荒れ野の旅」を経て世代交代した「イスラエル」をカナン地方に導き入れるに際して、モーセの後継者として指導的立場にあったともされている(申1:36など)。彼らは、その出身部族からして、ユダ・イスラエル王国時代の勢力を反映している。

・「アナク人」(22節、28節、33節)の存在が、カナン侵入を拒ませた理由として繰り返し指摘される。「アナク人」は、「ヘブロン」を拠点にしていた一族を指すと見られ、その子孫の名(22節、ヨシュア15:14)や先祖の名への言及(ヨシュア14:15、同15:13)などからも、特定の民族的枠組みではないと考えられる。この「ヘブロン」を拠点とする「アナク人」は、カナン入植に際してヨシュアが先頭に立って排除した後、その地方の支配権を「カレブ」らユダ族に与えたものとされている(ヨシュア15:13)。

・「アナク人」は、「背の高い民」(申2:10など)と呼ばれており、高身長の特徴を持つ集団だったと推認されるが、そのことを示す比喻として「ネフィリム」が取り上げられている。「ネフィリム」は、「ノアの物語」の導入部で描かれる「神の子らが人の娘たちのところに入って産ませた者」(創6:4)とされる伝説上の存在。

使徒書日課(Ⅱコリント4章より)

・「コリントの信徒への手紙二」は、「パウロ書簡集」の第三に置かれた書簡文書。本書の概要については、資料「聖書と祈りの会 260311」を参照。日課箇所は、当該使徒書日課に続く箇所。

・使徒パウロは、生前の主イエスを直接知らず、使徒たちの教会が活発に活動をするようになった後に、その信仰を知り、当初はそれに反対し教会を迫害する立場を取ったが、その活動の最中に「復活のイエス」の顕現体験をして教会に加わった者であることを、自ら証している。彼は、その体験を根拠に自身のキリスト信仰に確信を持っていたと思われるが、生前の主イエスを直接知らないことで、使徒たちと比較され、発言が軽んじられることもあったと推認される。「コリント教会」には、使徒ペトロを指導者とするローマ教会系の人も多く、特に彼らからは信用されることが少なくなかったと想像される。「手紙一」では、ペトロら使徒たちおよび他の第一世代の弟子たちに続いて、自分も「復活のイエス」に現れていただいたのだと述べており(Ⅰコリ15:3~8)、第二世代以降のキリスト信者も「復活顕現体験」をし得ると考えていることを明示しているが、他方でパウロは、各書において、洗礼によってキリストと結ばれた者の霊的な一体化を繰り返し強調している。日課箇所も、その延長線上で、復活のイエスと一体化された信仰者が復活の希望を得ていることで、失望せず、落胆せずにいられるのだということを述べている。

・16節の「わたしたちの外なる人」と「わたしたちの内なる人」という表現は、ある種の霊肉二元論を発想させる表現となっている。パウロは、「手紙一」15章で「復活」について述べる際は、霊肉二元論的な説明になることを避けようとしているところがあるが、日課箇所ではむしろ、霊肉二元論の発想に摺り寄せて説明しているようにみせる。コリント教会に属する信者の文化的背景や思考の傾向を考慮して、ギリシア的霊肉二元論に寄せて述べているのかもしれない。

福音書日課(ヨハネ 20 章より)

・日課箇所は、「ヨハネ福音書」の伝える復活顕現伝承の第二場面。「ヨハネ福音書」は、共観福音書と共通する「空の墓伝承」を第一場面として述べた後、「ルカ福音書」との共通性の高い「弟子たちへの顕現伝承」を第二場面として置いている。「ヨハネ福音書」は、当初、この第二場面の説話をもって本編を終えていたと考えられるが、後に、21 章に置かれている「ガリラヤのティベリウス湖での顕現伝承」を第三場面として追加した上で、最終的な本編の末尾としている。

・日課箇所場面は、実際には二週にわたって起こった出来事を伝える説話となっている。前半(19~23 節)は、マグダラのマリアら女性たちが「週の初めの日、朝早く、まだ暗いうち」(20:1)に墓を訪ねた「空の墓の出来事」と同じ日の「夕方」に、弟子たちが一つの家に集まっていたときのこととして物語られている。後半(24~29 節)は、そのときに同席していなかった「ディディモと呼ばれるトマス」の動向を伝えた上で、最初の出来事から「八日目」すなわち一週間後に再び弟子たちが集まっていたときのこととして語られている。「八日目」は翌週の「週の初めの日」を指すと解され、おそらくは、使徒たちの教会で「週の初めの日」に繰り返し集まることが定着していった時代背景が反映されていると考えられる。

・前半(19~23 節)で描かれる、弟子たちへの復活顕現の伝承逸話は、「ルカ福音書」が伝える同様の伝承逸話(ルカ 24:36~48)と多くの共通点がある。19 節および 21 節の「あなたがたに平和があるように」は、「ルカ」でも告げられており(ルカ 24:36)、22 節の聖霊授与の告知も、「ルカ」では聖霊降臨への待望と言う形で告知されている(ルカ 24:49)。「ルカ」と「ヨハネ」は、「空の墓伝承」でも、他の福音書とは異なる点で共通点が見られる(両福音書は、婦人たちの報告を受けたペトロが自ら墓を確認しに行ったことを伝えているが、他の福音書は伝えていない)。

・「トマス」は、「共観福音書」では「十二人」のリストに名が挙げられるだけで、物語において何らかの役割を果たす人物として登場することはないが、「ヨハネ福音書」は、繰り返し登場させている(11:16、14:5、21:2)。「ヨハネの教会共同体」との特別な関りがあったことが示唆される。

・23 節の「罪の赦し」の権限付与は、「マタイ」が教会の権威として繰り返し強調している。あるいは、「共観福音書」が「使徒任命」に伴って「悪霊追放の権限」を付与を伝えるのも、おなじ視点のことかもしれない。

来週の誕生日 (4 月 12 日~18 日)**主日礼拝の讃美歌から**

・21-328「ハレルヤ、ハレルヤ(たたかいは終わり)」(= I 146)は、17 世紀のラテン語聖歌を 19 世紀英国国教会のニールが英訳、さらにフランシス・ポットの改訳に基づいて英語讃美歌集に収められて

広く歌われるようになった。曲は、16 世紀の代表的作曲家パレストリーナの名が記されているが、彼の曲にヒントを得て 19 世紀英国の音楽家ウィリアム・モンクがポットの英訳詞のために作曲。

- ・21-333「主の復活、ハレルヤ」は、20 世紀後半のタンザニア・ルター派牧師キヤマニワがスワヒリ語で作詞しハヤ族の伝統的旋律を付して発表。原曲は結婚式における宗教儀式で歌われる舞踏歌。ルター派でドイツ語に訳され広く知られるようになった。
- ・21-329「目覚めよ、歌えよ」は、18 世紀英国のジャーナリスト・スマートの作詞。18 世紀英国の国教会司祭ホイスの原曲を音楽家サミュエル・ウェップ Jr が讃美歌用に整えた曲と組み合わせられている。

21-328「ハレルヤ、ハレルヤ」= I 146**Finita Jam Sunt Praelia**

Alleluia, Alleluia, Alleluia.

Finita iam sunt proelia, / Est parta iam victoria: / Gaudeamus et canamus, / Alleluia.

Post fata mortis Barbara / Devicit Jesus tartara: / Applaudamus et psallamus, / Alleluia.

Surrexit die tertia / Caelesti clarus gratia / Insonemus et cantemus, / Alleluia.

Sunt clausa stygis ostia / Et caeli patent atria: / Gaudeamus et petamus, / Alleluia.

Per tua, Jesu, vulnera / Nos mala morte libera, / Ut vivamus et canamus, / Alleluia. Alleluia!

Alleluia! Alleluia! Alleluia!

21-333「主の復活、ハレルヤ」**Mfurahini, haleluya****English Translation**

1. Christ has arisen, alleluia. / Rejoice and praise Him, alleluia. / For our Redeemer burst from the tomb, / Even from death, dispelling its gloom.

Refrain: Let us sing praise to Him with endless joy; / Death's fearful sting He has come to destroy. / Our sin forgiving, alleluia! / Jesus is living, alleluia!

2. For three long days the grave did its worst / Until its strength by God was dispersed. / He who gives life did death undergo; / And in its conquest His might did show. / (Refrain)

3. The angel said to them, "Do not fear! / You look for Jesus who is not here. / See for yourselves the tomb is all bare; / Only the grave cloths are lying there." / (Refrain)

4. "Go spread the news: He's not in the grave; / He has arisen this world to save. / Jesus' redeeming labors are done; / Even the battle with sin is won." / (Refrain)

5. Christ has arisen; He sets us free; / Alleluia, to Him praises be. / Jesus is living! Let us all sing; / He reigns triumphant, heavenly King. / (Refrain)

21-329「目覚めよ、歌えよ」**Awake, arise, lift up your voice**

1. Awake, arise, lift up your voice, / let Easter music swell; / rejoice in Christ, again rejoice, / and on his praises dwell.

2. Oh, with what gladness and surprise / the saints their Saviour greet; / nor will they trust their ears and eyes / but by his hands and feet:

3. those hands of liberal love indeed / in infinite degree, / those feet still free to move and bleed / for millions and for me.

4. His enemies had sealed the stone / as Pilate gave them leave, / lest dead and friendless and alone / he should their skill deceive.

5. O Dead arise! O Friendless stand / by seraphim adored! / O Solitude again command / your host from heaven restored!